信濃毎日新聞　２０２３年２月１日

市民芸術館 見えぬ将来像

串田氏退任後の監督 松本市が人選進める

約20年にわたり、まつもと市民芸術館（松本市）のトップを務めてきた串田和美総監督(80)が本年度で退任するのを前に、松本市は後任の人選を本格化させている。これまでに、数人で監督業務を分担する「複数制」導入の方針が固まるなど、大きな転換点を迎える。だが、監督の人選にも大きく関わる館の将来像を市は示していない。地域に根差した公共劇場をどう発展させていくのか、市民意見を踏まえたビジョンづくりが求められる。

（田中 萌子）

地域を見つめて

地域に根差す劇場 どう発展

市民の意見踏まえて示す必要

1月27日、同館で開かれた新監督を選ぶ検討委員会会合には委員5人全員が出席。非公開の協議後、青山織人委員長（市芸術文化振興財団理事長）は、委員がそれぞれ監督候補者の名前を挙げて議論したと明かした。

だが、選考の難しさを指摘する声もある。選考の前提となる館の将来像を市が主体的に示していないためだ。関係者は「文化芸術行政として館が市民に何を提供するのか、市のビジョンが見えてこない。どういう人を選べばいいのか…」と漏らす。市内で文化活動に携わる男性は「市民の意見も踏まえて市が館のミッション(役割)を明確にし、その後に人選に入るべきだったのではないか」と疑問を投げかける。

1月27日に開いた検討委員会の会合。新監督の候補者名を挙げながら議論したという

◇

串田さんは、開館前年の2003年に館長兼芸術監督に就任した。市は21年3月、串田さんを総監督とすると発表。任期は、芸術監督就任から20年の節目となる23年3月31日までとし、延長はしないとした。後任を選ぶ検討委の会合は昨年10月に始まり、これまで3回開催。本年度内に候補者を固め、臥雲義尚市長に答申する。

市も館の将来像の検討を進めている。21年9月には館の在り方を考える専門家会議を設置。会議は昨年5月に提言書を市に提出した。学校などに出向く「アウトリーチ」活動や制作スタッフの充実、市が拠出する補助金の水準維持などを要請したほか、「市民をパートナーとして協働をすすめること」も求めた。

臥雲市長は昨年12月の定例記者会見で「提言書が一つのビジョンと受け止めている」とし、今後市民に内容の周知を図ると述べた。ただ、人選が本格化している今も、市は提言書を基にした具体的な方向性を示していない。市文化観光部の小西敏章部長は「検討委の答申を踏まえ、市としての方針を市民に示したい」と話す。

市のビジョンが示されないまま人選が進む状況に対し、提言書をまとめた専門家会議で座長を務めた一般財団法人地域創造（東京）プロデューサーの津村卓さんは「市としての方向性が示されなければ監督の人選も難しいのではないか」と懸念する。

市民も出演する「信州・まつもと大歌舞伎」、サーカスや芝居、音楽を融合し、客席と一体となった舞台を繰り広げる「空中キャバレー」などの会場として市民から親しまれてきた同館。津村さんは、国内外で高く評価される演劇作品を約20年にわたって地方から発信してきた同館の動向は「全国的に注目度が高い」と指摘。「新しい時代に向かって進むためには、市民に共感を持ってもらい、互いに支え合える関係性づくりが重要だ」と話している。